

労働調査という逆説

石田 光男

本誌の過去の提言を眺めていたら2013年2・3月号(632号)で守島基博教授の「労働調査研究のあり方を考える」という文章に出会った。

守島教授の提言に次のような言葉がある。「労働調査研究そのものが、大まかな流れとして、政策的に意味がある、または話題性のあるテーマに集中している」「この傾向が行き過ぎると、労働場面で基礎的な賃金、労働時間、人材育成、昇進、移動、貧困などについての質の良い研究が行われなくなる可能性がある」と。全く共感した。これに励まされ、気恥ずかしいけれど、労働調査についての私の正直な気持ちを書いてみようと思いつめた。

労働調査とは計量的調査と事例調査の二つがある。もう一つ、調査とは言えないが文献研究もある。ここで文献研究という研究方法について、これを軽視すると労働調査の質の劣化をもたらすことを言いたいと思う。そう言う労働調査にあっても必ず報告書の執筆で先行研究のレビューを行って、計量的調査では「仮説」を、事例調査では「課題」を特定する作業を行っているのに何をいまさらという反論が聞こえてきそうである。それはそうだが、その作業の実際は「仮説」や「課題」を特定するための助走としての作業に過ぎないのではないか。そのことを憂慮している。

調査の助走としての先行研究レビューではない文献研究は、かつては労働分野での学問の支柱であった。私事で恐縮だが、指導を仰いだ中西洋教授に「君、調査報告書はなかなか研究業績としては認められないのだ」と言われたこともあったし、調査の話私を持ちかけると「君、いつになったら学問を始めるのだ」といわれたこともある。私は心の奥底で先生の言うことは正しいと思っていたし、今もそう思っている。ただ、頭も悪く不器用な自分には、立派な文献をいくら読ん

でも「分かった気になれない」ことが多く、調査をして「腹の底から分かった」と思えることを書けるような研究を進めるしかこの世界で自分に生きる道はないと覚悟を決めたのも先生の教えを受けたからであった。今も私は「文献研究で分かったら、わざわざ気の重い調査をする必要はない」と大真面目に院生に言っている。

分からなかったことは、賃金に関しては、80年代は「年功賃金」、90年代後半以降は「成果主義」、働き方に関しては、80年代以降は「日本の自動車工場の国際競争力」、2000年代以降は「グローバル経営」であった。文献の中にこれらの語彙は夥しく登場するけれど「分かった気になれない」という焦燥に突き動かされて、気の重い調査をせざるを得なかった。その調査は他者の評価はともかく、少なくとも自分を納得させることはできた。

だから、労働調査において大切なことは、第一に文献研究でやすやすと「分かった気にならない」自分を持つこと。第二に、「自分を納得させるためには何をどのように調べたらよいのか」をよく考えること。第三に、上に例示したように分からない事柄は広漠としているから、これをどう調査に馴染むような具体的な問いにできるかを繰り返し考え、友と果てしもない楽しい「雑談」を繰り返すことである。厳しく業績の本数が問われる時代にあって、守島教授の言われる良質な調査を支える楽しい「雑談」がどこまでなされているのか心配ではあるが。

そういう労働調査は、分からなかった文献に対して、その概念や理論への批判をもって返礼することになり、結局は、すぐれて理論研究になってしまう逆説の中に置かれている。この逆説に労働調査研究の栄光があるのだと祝福してよいのではないか。

(いしだ・みつお 同志社大学教授)